



祈る心を育むまち浦上・長崎

鳥巢 義文

猛暑の続く8月のある一日、長崎を訪れ浦上地区を歩いた。市電大橋停留所に近いサンタ・クララ教会跡から浦上川をわたり本原教会をめざすと、途上、かつてキリシタンが集った秘密教会(礼拝堂)の跡地にひっそりと石碑が置かれ、ベアトス様の墓、帳方屋敷跡、十字架山、一本木山などと共に浦上一帯は往時の信徒の信仰を偲ぶことのできるまちになっている。

ザビエルら外国人宣教師が1550年に平戸に着いてから長崎各地でキリスト教布教が始まった。1567年頃には浦上でも布教がなされていたという(Webページ「浦上小教区沿革史」^{注)}による)。豊臣秀吉が1587年にパレン追放令を発し、1597年には西坂の丘で日本26聖人の殉教という惨い出来事があった。それでも浦上ではイスパニア人宣教師による司牧が続いており、1603年にサンタ・クララ教会が建てられるほどのキリスト教信仰の里となっていた。その後1614年の徳川幕府による禁教令の発布で教会堂は壊されたが、続く厳しい弾圧の中、浦上のキリシタンは神父不在の状況下で帳方、水方、間役などの役職を中心に組織をつくり、潜伏しつつキリスト教信仰を守り伝えた。

2015年の今年、信徒発見150周年と称し、外国人居留地隣りの南山手に1865年に建立された大浦天主堂で起こったフランス人宣教師プティジャン神父と浦上の潜伏キリシタンとの奇跡的出会いが記念されている。しかしこの節目に最も大切なこととして記念すべきは、歴史的出会いの時まで、家康の禁教令から約250年もの長期にわたってキリシタンが自らの信仰を守りかつ次世代へと伝え続けてきたという奇跡的事実の方であろう。信徒が待ちわびたカトリック神父との出会いを喜びと感動をもって体験したのもつかの間のこと、その後幕府によるキリシタン検挙は一層厳しくなり、「浦上四番崩れ」という迫害が起こった。さらに1868年、明治政府によって浦上の信徒の全国各地への流配が行われた。禁教令の高札が撤去され、浦上の信徒が解放されたのは1873年のことである。浦上に戻った信徒はかつて自分たちを訴えた高谷の庄屋の敷地に聖堂を建てた。これが現在の浦上天主堂につながる。

私はこの浦上で生まれ、18歳まで過ごした。純心幼稚園の卒園後に、永井隆作詞で知られる「あの子」の歌と「あの子らの碑」のある山里小学校へ通った。通学路には信徒殉教者ベアトス様の墓石のある広場が隣接し、遊び場の一つになっていた。週に三回ほど浦上教会の要理教室へ通った。途中の帳方屋敷跡には如己堂やちょっと変わった外観の永井図書館が建っており、本を読んで過ごすこともあった。中学・高校は如己堂から少し上ったところにある長崎南山学園へ通った。隣接する神言会の神学校は聖ルドビコ小神学校と呼ばれるが、西坂の殉教者の最年少12歳のルドビコ茨木にあやかっている。いま振り返ると、実家と教会とを結ぶ学びの小路は何代にもわたる浦上の信者の願いと希望に満ちていた気がする。

この夏「浦上天主堂」を鍵語に、プロジェクションマッピングを用いて旧浦上天主堂を現天主堂の正面に原寸大で再現する催しがあった。これは信徒発見150年と被爆70年との二つの記念が重なった今年、信仰の歴史とこれからの被爆体験の継承を考えるという意向のもとに長崎出身の被爆三世世代の人々が中心になって実現した企画であった。浦上には今も祈りの伝統が根づいている。これを継承していくのはそこに生きる人々一人ひとりである。潜伏時代同様に現代においても世代交代は進んでいる。思いを共有し同じ心を育てていきたいものである。

(TORISU, Yoshifumi : 人文学部教授)

注)「浦上小教区沿革史」(<http://www1.odn.ne.jp/uracathe/henkakusi.htm>) [accessed 2015.10.1]

日本カトリック大学連盟図書館協議会2015年度実務研究会報告 -長崎「信徒発見」の旅-

加藤 富美

2015年6月25日、26日の2日間にわたり、日本カトリック大学連盟図書館協議会総会および実務研究会が開催された。初日の総会終了後には、長崎教区の司祭である古巣馨神父の司式により大浦天主堂でミサが行われた。



大浦天主堂、ミサに向かう一行

大浦天主堂は、日仏修好通商条約に基づいて、1864年、居留地内にフランス人の礼拝堂として建てられた日本に現存する最古の教会である。日本二十六聖人に捧げる教会として、処刑の地、長崎西坂に向かって建てられた。その献堂式からわずか1ヶ月ほど後の1865年3月17日、浦上の潜伏キリシタンらがこの教会を訪れ、プチジャン神父 (PETITJEAN, Bernard-Thadée, 1829-1884) に「わたしのむね、あなたのむねとおなじ」「サンタマリアのご像はどこ?」と声をかけ信仰を告白した。これが、「信徒発見」として、今もなお世界中に語り継がれている出来事である。私たちは、150年の時を経て、同じサンタマリアの像と向き合い、往時に想いを馳せつつ、静かな聖堂の中で祈りを捧げた。

こうして、長崎の「信徒発見」の旅は始まった。今年度は九州地区のカトリック大学のご尽力により、2日目に実務研究会として所縁の地にご案内いただけることになったからである。長崎は今、「長崎の教会群とキリスト教関連遺産」「明治日本の産業革命遺産 九州・山口と関連地域」の二つで世界文化遺産登録を目指しており、国内外から注目を集めている(「明治日本の産業革命遺産」は2015年7月の第39回ユネスコ世界遺産委員会において登録が決定した)。

旅の案内役は長崎純心大学のSr.片岡瑠美子学長。片岡学長は小雨の中、レインコートで修道服を覆い、マイクを持って笑顔で私たちを迎えてくださった。総勢22名、いざ出発である。

■JR長崎駅出発

長崎は今日も雨♪。長崎駅を出発してすぐに崖の下でバスを下車。崖の石垣は昔の岸壁とのこと。かつてはここまで海だったのだと今日もまた過ぎ去った彼方に思いを巡らせながら、坂を上って、西坂公園に向かう。

どんよりとした空の下、西坂の丘に日本二十六聖人のブロンズ像が港に向かって静かに建っている。ここは日本二十六聖人の処刑の地。将来、巡礼地となることを見込んだイエズス会士の要請で一般処刑場ではないこの地での処刑を願い出たと伝えられている。彫刻家の舟越保武(1912-2002)は、京都出発時の姿のまま1ヶ月間歩き続けた殉教者たちに晴れ着を着せ、足先をまっすぐ伸ばして昇天する姿で刻んだ。

1596年10月、嵐にあって日本に漂着したスペインのサン・フェリペ号。この船には約200人の船員、乗客と共に、膨大な絹や織物などが積み込まれていた。その積み荷をめぐる確執から騒ぎが次第に大きくなり、「スペインはキリスト教信者を増やして、やがてその国を征服する」という噂を聞いて不安を感じた豊臣秀吉は、日本で布教活動を行う宣教師や信徒の捕縛と処刑を命じた。京都や大阪・堺で捉えられた24人は、途中で2名が加わって26人となり、約1ヶ月かけて処刑地である長崎までのおよそ千キロの道のりを裸足で歩かされ、1597年2月5日、通常の処刑場から急遽変更された西坂の丘で処刑された。長崎市内では混乱を避けるために外出禁止令が出されていたにも関わらず、4000人を超える群衆が集まっていたという。この事件は宣教師によってヨーロッパに報告され、日本ではまだキリシタン迫害が続く1862年に、ローマ教皇が殉教者26人を聖人に列したことから、「日本二十六聖人」と呼ばれている。

■日本二十六聖人記念館・記念碑

1962(昭37)年、日本二十六聖人の列聖100年を記念して、かつての殉教地西坂の丘に記念館と記念碑が建てられた。日本を代表する彫刻家である舟越は約4年の歳月を費やして等身大の二十六聖人の記念碑を完成させた。片岡学長のご尊父、片岡弥吉氏(1908-1980、元純心女子短期大学副学長・キリシタン研究者)は、殉教者の精神を知るためには、彼らの思いが刻み込まれた道を自分の足で歩いてみなければならないと言って、最後の2日間に26人が歩いた浦上街道を舟越と共に辿ったということである。

■聖フィリッポ・デ・ヘスス教会(西坂教会・日本二十六聖人記念聖堂)

西坂教会は日本二十六聖人のひとり、メキシコ人フランシスコ会修道士フィリッポ・デ・ヘスス (St. Felipe de Jesus Casas Martinez, 1572-1596) に捧げられた教会で、日本二十六聖人記念館と同時期に建てられた。設計は日本二十六聖人記念館と同様、スペインの建築家アントニオ・ガウディを日本に紹介した人物としても知られる今井兼次(1895-1987)で、この聖堂にはガウディ建築の要素が盛り込まれていることが外観からも明らかである。この教会



「長崎浦上街道ここに始まる」と刻まれた碑の前の片岡学長



日本二十六聖人の記念碑



聖フィリッポ・デ・ヘスス教会

はメキシコからの浄財で献堂されたことから、司祭叙階のためにサン・フェリペ号に乗船していたメキシコ人殉教者聖フィリップ・デ・ヘスの名が付けられている。

再びバスに乗って10分程、浦上天主堂は原爆落下中心地からわずかの場所にある。周囲には、長崎大学医学部、平和公園、原爆資料館などがあり、カトリックセンターやカトリック大司教館、カトリック神学院など関連の施設も多い。

■浦上天主堂

禁制中、絵踏が行なわれた庄屋敷があったこの高谷の丘に、絵踏のゆるしを願って祈りたいという信徒の思いを受けとめたフレノ神父 (FRAINEAU, Pierre Theodore, 1847-1911) の設計により、1895 (明6) に建築が進められ、途中ラゲ神父 (RAGUET, Emile, 1854-1929) が引き継ぎ、完成まで19年を要して、「信徒発見」から49年後にあたるちょうどその日、1914 (大3) 年3月17日に献堂式が行われた。1945 (昭20) 年8月9日、東洋一のレンガ造りロマネスク様式の大聖堂は原爆で破壊され、フランス製のアンジェラスの鐘とともに崩れ落ちた。当日はゆるしの秘跡 (告解) が行われていたため、多数の信徒が天主堂に集まっていたが、原



浦上天主堂



原爆で崩れ落ちた浦上天主堂の鐘楼

爆による熱線や、崩れてきた瓦礫の下敷きとなり、司祭や信徒ら全員が死亡、12,000人の信徒のうち8,500人が原爆の犠牲となった。破壊された天主堂跡は原爆資料保存の議論が行われたが、1959 (昭34) 年に鉄筋コンクリートで再建されることになった。1980 (昭55) 年、ローマ教皇ヨハネ・パウロ二世を迎えるにあたり、もとの赤いレンガ造りの外観に再建された。

浦上天主堂には瓦礫の中から見つけ出されたマリア像の頭部と原爆によって吹き飛ばされた天主堂の鐘楼の一部が、現在もそのままの姿で残されている。

■^{よこ}如己堂・^{ちよかた}帳方屋敷跡

カトリック信者だった永井隆博士が、聖書の中にある「己のごとく隣人を愛せよ」という意味を込めて名付けた二畳ほどの家で、帳方屋敷の跡地でもある。原爆で妻を失い、自らも白血病にかかりながら、被爆者の救済にあたった。

今回の「旅のしおり」(『「マリア像」が見た奇跡の長崎 (旅する長崎学4, キリシタン文化4)』長崎文献社, 2006より抜粋) によると、「惣頭 (帳方) は村にひとり選挙で選ばれた。日繰り (バスチャン暦) とよばれる教会暦や宗教書を所持し、年中の祝日や教会行事を繰り出して、祝日や教理、オラショ (祈り) を触頭 (水方) につたえる役割があった。組織員の名簿や規則を記したお帳を保管したので帳方とよばれた。…永井隆博士の妻みどりさんは最後の惣頭吉蔵の曾孫にあたる」とある。



ド・ロ神父像

途中、昼食をとって、長崎の西海岸、^{そとめ}外海地方へ向かう。遠藤周作の小説『沈黙』の舞台となった外海。晴れていれば東シナ海を臨む素晴らしいロケーションとのことだが、本日は小雨に煙ってほとんど見えない。

聖マリア学院医療福祉専門学校 (聖マリア学院大学の前身) 理事長でいらっしゃった井手道雄氏が書かれた『西海の天主堂路』(新風舎, 2009) には、「山が直接海に迫り、平地に乏しく、深い入り江にも恵まれない外海地方。そしてその上に明治初期のキリシタン弾圧で拷問を受け、郷民からも乏しい財産を収奪され、雨露を忍ぶだけの粗末な家に耐える貧しい復活したカトリック信者の先頭に立ち、フランスのド・ロ家から引き継いだ全遺産を注ぎ込み、信者の司牧と地域の産業開発、社会福祉、教育にド・ロ神父は一生を捧げた」とある。

■^{しつ}出津教会堂

1879 (明12) 年に出津に赴任したド・ロ神父 (De ROTZ, Marc Marie, 1840-1914) が、信者と力をあわせて1882 (明15) 年に完成させた。強い海風に耐えられるように屋根を低くした木造平屋で、錠戸も引き戸になっている。漆喰の白い外壁が霧の中に浮かび上がり、清楚なたたずまいが美しい。



小雨に煙る出津教会堂 (国指定重要文化財、世界遺産登録候補資産)

■ド・ロ神父記念館 (旧出津イワシ網工場)

1885 (明18) 年建設の木骨煉瓦造り、平屋建てで、婦女子の副業として当時盛んであったイワシ網の工場として建てられた。その後、工場は廃止され保育施設として利用された。

今は記念館として、絵画や洋服、製造用具、助産婦養成のための医療器具など様々な所縁の品が展示されている。



旧出津救助院とド・ロ壁 (塀) (国指定重要文化財、世界遺産登録候補資産)

■旧出津救助院

ド・ロ神父が困窮を極める村人たちを救うために設立した明治初期の授産・福祉施設で、後に修道院へと発展する。ド・ロ神父独自の工法で築かれた「ド・ロ壁 (塀)」が囲んでいる。木造2階建てで、1階は仕切りのない土間の広い作業場になっていて、織物やマカロニ、そうめん製造などの技術を教え、人々の自立を促した。2階は修道女などの生活の場所に使用されていた。



ド口素麺製造の様子がわかる
救助院の1階

貴族の家に生まれたド・ロ神父は、施設建設や事業のために私財を惜みなく投じ、フランスで身につけた農業・印刷・医療・土木・建築などの様々な分野にわたる技術を外海の人々に教え、「ド・ロさま」と呼ばれて親しまれた。救助院にはド・ロ神父がフランスから送らせたという大きな置時計とオルガンが当時のまま残されている。外海の人々が長い間大切に守ってきた置時計は、今も変わらず15分ごとに祈りの時間を知らせてくれる。オルガンは簡単な操作で転調・和音に変わる貴重なもので、現役で音楽を奏でることができる。シスターが聴かせてくださったそのオルガンの素朴で美しい音色とともに、外海の風景が思い出される。

■^{そとめ}外海歴史民俗資料館

旧石器時代からの外海の深く長い歴史にまつわる数多くの貴重な資料を紹介する資料館。歴史・民俗・考古・産業・宗教に関する数多くの資料を展示している。

激しい雨になるかもしれないと、急ぎ足で回ったためか、予定より早く帰路についた。マカオから返還された日本二十六聖人の遺骨の一部、原爆で崩れ落ちた鐘楼の鐘、わずかに二畳の狭い部屋、海風のあたる小さな教会、東シナ海を臨む海岸線、修道女が奏でる清らかなオルガンの音色、そして今もお静かに信仰を守り伝える人々…。長崎の地を訪れて、この目で実際に見て感じたことは何ものにも代えがたい貴重な経験となった。「信徒発見」から150年、悠久の歴史からみればわずか150年の間に世の中は大きく変動した。殉教者などという言葉は遠い昔のことのようである。しかしながら一方で変わらないこともたくさんある。小さな教会堂の中にひとりしていると、海岸線をぼんやり眺めていると、時が止まっているかのような錯覚に陥ってしまう。「信徒発見」の旅は、今につながる歴史を辿る旅でもあった。このような機会を与えてくださった日本カトリック大学連盟図書館協議会九州地区の担当校の皆さまに感謝の気持ちをお伝えして、筆を置くこととしたい。

【参考文献】

- ・井手道雄『西海の天主堂路』（智書房、2009）
- ・『五島キリシタン史伝来と信仰のあゆみ』（五島市世界遺産登録推進協議会、2013）
- ・『長崎観光ガイドブック』（長崎国際観光コンベンション協会、2015）
- ・『長崎市ド・ロ神父記念館パンフレット』

(KATO, Fumi : 図書館事務課)

報告：記念petit講座「信徒発見150年」

日 時：2015年7月13日(月)13:30～15:00(3時間)／場 所：南山大学名古屋キャンパス MB12教室

三好 千春 教授(人文学部キリスト教学科)：発題者

西脇 純 教授(人文学部キリスト教学科)：発題者

アンジェリーナ・ヴォルペ 教授(総合政策学部総合政策学科)：コメンテーター

ロジェ・ヴァンジラ・ムンシ 准教授(外国語学部フランス学科)：コメンテーター

森山 幹弘 教授(南山大学図書館長、外国語学部アジア学科)：司会者

江戸幕府の禁教令下の1865年3月17日、浦上の潜伏キリシタンたちは、建てられたばかりの大浦天主堂(長崎)を訪れた。彼らはフランス人宣教師ベルナール・プティジャン神父に「われらのむね、あなたのむねと同じ」と信仰を表明し、「サンタ・マリアのご像はどこ?」と訊いたと伝えられている。この出来事は今では「信徒発見」として広く知られており、この「信徒発見」と「キリシタンの復活」は、日本の内外に大きな驚き、衝撃、そして感動をもたらした。今年2015年が「信徒発見」からちょうど150年目となることを記念して、南山大学図書館カトリック文庫協議会は、南山大学宗教教育委員会および人文学部キリスト教学科の協力を得て、ささやかな講座を開催した。

講座では、南山大学図書館長である森山教授の趣旨説明に始まり、三好教授および西脇教授による発題講義がなされた。まずは三好教授が、「バリ外国宣教会と信徒発見―幕末の日仏関係を背景に―」と題し、フランスの宣教会が幕末の日本に与えた影響について、フランスの外交が果たした役割と限界を踏まえつつ「信徒発見」につながる歴史的な流れを話された。続いて西脇教授が、「おらしよの系譜―『こんちりさんのおらしよ』と『完全なる痛悔の祈り』を例に―」と題して、潜伏キリシタンの心の支えとなった「おらしよ」を手掛りとして、「信徒発見」へと結びつく信徒たちの内面的動きを講じられた。これら外的・内的双方のアプローチを受けて、その後、ヴォルペ教授、ムンシ准教授および森山図書館長からコメントが加えられた。これにより、講座は、「信徒発見」の歴史的意義、現代的意味を再確認し、多面的な理解を促す格好の機会となった。また、図書館が所蔵する関連資料の小展示会も併せて行うことで、参加者の興味を一層惹きつけることができたはずである。

最後に三好教授および西脇教授により提供された配布資料の一部を再掲し、加えて展示資料の一覧を掲載して、講座の報告に代える。なお、西脇教授部分の内容の詳細は、『南山神学』誌上にて後日公表される予定である。

パリ外国宣教会と信徒発見 —幕末の日仏関係を背景に—

三好 千春(人文学部キリスト教学科)

1 パリ外国宣教会(Missions Étrangères de Paris : MEP)

1658年 アレクサンドル・ド・ロード(Alexandre de Rhodes)の提案に基づき、布教聖省が宣教会へ代牧(vicar apostolic)の派遣(下記の三人)を決定=創立年。*2008年に創立350周年を祝う。

《創立メンバー》

1660年 ランベール・ド・ラ・モット(Lambert de La Motte)、コーチシナの代牧

1661年 イニャス・コトランディ(Ignace Cotolendi)、南京の代牧

1662年 フランソワ・パリュ(François Pallu)、トンキンの代牧

1659年 布教聖省(Sacra Congregatio de Propaganda Fide 現在の名称は、「福音宣教会」Congregatio pro Gentium Evangelisatione)、「外国宣教に関する指針」提示⇒現地人聖職者を育てるため、先ず学校をつくり、ラテン語とキリスト教の教義を教えること。

《19世紀におけるMEPのアジアでの担当宣教地域》

*19世紀以前からの担当宣教地:シヤム(タイ)、ヴェトナム、インド(マラバル)。

1831年 日本および朝鮮半島、1838年 満州、1841年 マレーシア、1846年 チベット、1848年 中国の海南島、広東省、広西省、1855年 ビルマ、1899年 ラオス

2 MEPと日本

1)「信徒発見」まで

1844年 テオドール=オーギュスタン・フォルカド(Théodore-Augustin Forcade)神父¹(MEP)、中国人伝道士オーギュスタン高を伴い、琉球王国の那覇に上陸(4月30日)。聖現寺(しょうげんじ)に滞在(1846年5月まで)。

*1844~1862年の間、琉球王国に8人のMEP宣教師が滞在:フォルカド、ルテュリュデュ、アドネ、ジラル、カシオン、フューレ、ムニクー、プティジャン

1858年 日仏修好通商条約締結。

1859年 初代駐日フランス外交領事(のち公使)ギユスターヴ・デュシェーヌ・ド・ベルクール Gustave Duchesne de Bellecour)の通訳として、バルテルミ・ジラル神父(Prudence Seraphin-Barthelemy Girard)、江戸に入る。

*続いて、メルメ・カシオンが箱館に、ムニクーが横浜に、フューレが長崎に、プティジャンが那覇に入った。

1862年 横浜居留地80番(現在の山下町80番地)に、天主堂完成。

1865年 長崎の南山手外国人居留地に、大浦天主堂完成。2月19日、献堂式。

2)「信徒発見」

1865年3月17日 浦上の潜伏キリシタンたち、大浦天主堂を訪ね、ベルナル・プティジャン(Bernard-Thadée Petitjean)神父²に信仰を告白(「信徒発見」)。

……A peine avais je prié un instant qu'une femme de 40 à 50 ans vient tout près de moi, et me dit la main sur la poitrine 《Notre cœur à nous tous qui sommes ici, est le même que le vôtre.》 …… Puis aussitôt cette même personne me demande 《Sancta maria go zô wa doko?》 ……

(前略)私がほんの少しだけ祈った後、40歳ないし50歳くらいの女性が私のすぐそばに来て、胸に手をあてて言いました。「ここにいる私たちは皆、あなたと同じ心です。」(中略)

それからこの同じ人はすぐ私に聞きました。「サンクタ マリア ゴゾオ ワ ドコ」(後略)³

浦上に秘密教会建設:公現の聖マリア、聖ヨゼフ、聖フランシスコ・ザビエル、聖クララ聖堂。

3)「浦上四番崩れ」へ(※年月日等は新暦による。)

1867年4月 最初の「自葬」事件の発生。

*浦上のキリシタンたちは、庄屋や檀那寺の正徳寺に届けずに葬儀を行うようになり(=寺請制度への抵抗)、3ヶ月で7人が「自葬」された。⇒7月、浦上村の68名捕縛され入牢。(浦上四番崩れの発生)

*「崩れ」=潜伏キリシタンの摘発・迫害。

1867年11月9日 大政奉還。

1868年1月3日 「王政復古」(明治政府の成立)⇒浦上のキリシタン問題は未解決。

1868年4月 明治政府による「五榜の掲示」(そのうちの第三札「切支丹邪宗門ノ儀ハ堅ク御禁制タリ。若シ不審ナル者有之ハ其筋之役所へ可申出。御褒美可被下事。」)7月9日、明治政府流配策の実行を決定。翌日より、**第一次移送**(山口、津和野、福山の三藩に114名が預けられた)に着手(「旅」の始まり)。

¹ 1816~1885年。1839年にMEPにて叙階され、1842年に宣教師として東アジアに派遣される。1846年、日本の初代代牧(サモアの名義司教として)に叙階され、翌年香港の初代司教となるが、MEPは退会。その後、グアドループのパセテール司教、フランスのヌヴェール司教などを務めた。

² 1829~1884年。1853年司祭叙階。1859年にMEP入会。1860年那覇へ、62年横浜へ派遣され、63年から長崎に着任。1866年に日本代牧、1876年に日本教区の南北分割後は日本南緯代牧司教。

³ 長崎純心大学長崎学研究部編『1865年プティジャン書簡—原文・翻刻・翻訳—「エアリア写本」より—「信徒発見150周年」記念』長崎純心大学博物館 2015年 42頁および114頁。

1869年12月 信徒の大量流刑(第二次移送)の開始。

★3,300名ほどが20藩に分けて配流される(人数については諸説あり確定せず)。

※配流地:富山、金沢、大聖寺、名古屋、津、大和郡山、和歌山、姫路、岡山、福山、広島、鳥取、松江、津和野、山口、高松、徳島、高知、松山、鹿児島島の20藩および津藩が分散して置いた大和古市、伊賀上野、伊勢二本木の三ヶ所。

1873年2月24日 切支丹禁制の高札を撤廃。=キリスト教の「黙許」。

※4~7月にかけて、20藩に流されていた信徒たちの帰郷。

3 フランス政府の対日外交

1) 開国まで

1847年 フランスの小村ディーニャに「日本改宗のための祈りの会」誕生。

※会員の務めは、「聖フランシスコ・ザビエル、私たちのために、そして特に日本のためにお祈りください」と毎日祈ること。

日本を開国し、日本人を救うために私たちができるのは、祈ることだけなのです。祈って、祈って、祈るのです。この信心会の故に、あなたは私以上に新しい日本の使徒となるでしょう。(フォルカード日本代牧より、祈りの会の創立者レオン・ロバン神父宛書簡)⁴

☆カトリック教会(宣教師たち):キリスト教への熱意を抱き、日本の開国を待望。

★フランス外務省:1854年~57年段階では、対日条約交渉にあたり宣教師の日本国内部への出入権要求を意図。しかし、1858年の条約交渉時、全権のジャン・バティスト・レイグロ男爵(Jean-Baptiste Louis Gros)への訓令では宗教関連を削除⁵。

2) 浦上四番崩れの発生:MEP宣教師たちの宣教活動をめぐって

★プティジャンの要請を受けたフランス公使レオン・ロッシュ(Michel Jules Marie Léon)を中心に、各国公使・領事からの解放要求。1867年9月、ロッシュと徳川慶喜会見(決着せず)。10月、全員出牢し村預けと他郷への往来禁止で決着(事実上の無罪放免)。

ロッシュはこの措置を幕府の好意と受け止め、長崎のフランス人宣教師たちに宣教活動の禁止を要望(フランス政府も全面的にロッシュの方針を支持。)

……司教閣下⁶に対し今後日本国民をしてその国法に違反または挑むを奨励することは一切なさざるよう告げられたい。(駐長崎副領事ジョゼ・フレック宛ロッシュ書簡)⁷

※ロッシュと幕府間の特殊関係(親幕政策)。(横須賀製鉄所の建設、横浜仏語伝習所の設立、フランス軍事顧問団の派遣など⁸)

☆当初、宣教師たちは幕府と親密なロッシュの斡旋に期待するも、ロッシュの「…今日、問題の決定的解決を望むべきではない」⁹との文書に不満。

わがカトリック国フランスの代表者たる者が、相手国の主張を多少なりとも強い言葉で非難することなく、それを放置しておくべきではないと私は思います¹⁰。

プティジャンはキリシタンたちを「反徒」と扱ったとしてロッシュに抗議¹¹(同年、フランスに帰国しナポレオン三世に直訴したが、反応は芳しくなかった)。

3) 「旅」と「黙許」について:慎重な公使と「熱狂」の宣教師

★ウートレイ公使¹²は宣教師たちの請願にも拘わらず、強硬姿勢を避け、慎重政策を採る。浦上問題で日本政府を追い詰めないという方針。

キリスト教は本来、平等意識と社会的独立性に結びついたものであるから、それが階級と職業によって成り立つこの国の組織を崩壊させるような性質を持つ以上、日本政府が宣教師たちの熱心さを迷惑と思うのは当然である¹³。

※各国公使も、第一次移送の際、禁教令を宣教師側が破った(「国法」違反)という負い目があり、真正面から明治政府を攻撃せず。ただし、迫害の実態が明らかになると、取扱いの内容を問題にし、抗議¹⁴。

・フランスは普仏戦争(1870年)後、第二帝政から第三共和政へ移行。

・1871年末、ウートレイが離任し、ド・テュレンヌ伯爵が臨時代理公使となる。テュレンヌは明治政府の進歩的姿勢を高く評価し、外務省への報告で宣教師たちの「思慮に欠ける熱狂ぶりを非難」¹⁵。

※1871年から、キリシタンへの待遇の改善が始まる。

☆プティジャンをはじめ宣教師たちは、迫害の状況を報告書、書簡に詳述。各国公使たちの消極的対応、特にフランス公使の対応に不満。

《フランスの対日外交の特徴》

・日本におけるフランスの利益より、良好な対英関係維持に重点あり¹⁶。

・19世紀のフランスの対日政策の動機=威信(prestige) / フランスの影響力を拡大したいという欲求¹⁷。

★交易でも、宗教問題でもなく⇒フランス外交官と宣教師の間の齟齬。

⁴ 太田淑子編『日本、キリスト教との邂逅—二つの時代に見る受容と葛藤—』オリエンス宗教研究所 2004年 190頁。

⁵ リチャード・シムズ(矢田部厚彦訳)『幕末・明治日仏関係史—1854~1895年—』ミネルヴァ書房 2010年 6~7頁。

⁶ 1866年にプティジャンは日本代牧(名義司教)になっている。

⁷ フランシスク・マルナス(久野桂一郎訳)『日本キリスト教復活史』みすず書房 1885年 336頁。

- 8 ロッシュの親幕府の姿勢を、ロッシュの「個人外交」と見るか、フランス政府の対日外交方針を反映したものと見るか、研究者によって評価は分かれるようである。
- 9 太田淑子「宣教師の再渡来とキリスト教一幕末の浦上切支丹問題」中央大学人文科学研究部編『近代日本の形成と宗教問題(改訂版)』中央大学出版部 1993年 29頁。
- 10 同上、27～28頁。
- 11 フランシスク・マルナス前掲書、336～338頁。
- 12 フランス政府は1868年にロッシュに換え、アンジュ＝マクシム・ウートレイ (Ange Georges Maximilien Outrey) を公使とした。
- 13 ウートレイの言葉。リチャード・シムズ前掲書、92頁。
- 14 家近良樹『浦上キリシタン流配事件 キリスト教解禁への道』吉川弘文館 1998年 48～49頁。
- 15 リチャード・シムズ前掲書、98頁。
- 16 同上、351頁。
- 17 同上、347頁。

おらしよの系譜 —『こんちりさんのおらしよ』と『完全なる痛悔の祈り』を例に—

西脇 純(人文学部キリスト教学科)

1.「こんちりさんのおらしよ」から『完全なる痛悔の祈り』へ

こんひさん(Confissão ゆるしの秘跡)— こんちりさん(Contrição 真実の後悔、痛悔)— 「こんちりさん」の役割 —「こんちりさんのおらつ所」

2.「ただひとえに御大切にわもやうされ」

「^{ただひとへ} ^{ごたいせつ} ^{おほい} 偏に御大切に催され」(『聖教日課』)—「^{ただひとへ} ^{ごちうあい} ^う 唯偏に御寵愛に催がされ」(『痛悔の誦』『公教日課』)—「^{ひとへ} ^{おんいつしみ} ^{かん} 偏に御仁慈に感じ」(『公教会祈祷文』1909年版)—「ひとえに御慈しみに感じ」(『公教会祈祷文』1948年版)—「ただひとえに神への愛に於かれてのことで」(長谷川集平『こんちりさんのりやく・ロザリオ』、1997年より「青空文庫」でも公開中)

■関連年表

1563年	12月 4日	トリエント公会議閉幕
1566年		『Catechismus Romanus』 トリエント公会議の教令に基づき公布されたローマ・カトリック教会の教理問答書。
1570年		『Missale Romanum』 トリエント公会議の教令に基づき公布されたローマ・ミサ典礼書。
1591年		『どちりいなさりしたん』 マルコス・ジョルジェS.J.が1566年にリスボンで刊行した児童用教理書『Doctrina Christaã』を範に編纂され翻訳されたキリシタン時代の教義書。使徒信条、主要な祈り、十戒、教会の掟、秘跡、徳などを解説。
1603年		『こんちりさんのりやく』 日本司教セルケイラS.J.(Luis de Cerqueira, 1552-1614)が1603年に編刊した「真実の後悔 Contrição」についての解説書。原本は失われたが写本が複数残っている。原本は長崎の島原町(現・万才町)にあった長崎の町年寄、後藤宗印(1545-1627)の印刷所で印刷されたとみられる。本書のテーマである「こんちりさん」、すなわち「真実の後悔(痛悔)」は、「こんひさん(Confissão、ゆるしの秘跡)」において信徒がなす三つの行い(痛悔、罪の告白、償い)のひとつ。聴罪司祭不在に悩んだ日本の教会の迫害期にあって、心に「こんちりさん」を抱いて生活すれば、罪のゆるしと永遠の救いが得られると説く本書は、潜伏キリシタンの心の拠り所となり、潜伏キリシタンは、寺参りや絵踏みの後、償いとして、本書に収められる「 こんちりさんのおらしよ 」(おらしよ=oratio)を唱えた。
1605年		『サカラメント提要』 セルケイラ(Luis de Cerqueira, 1552-1614)が日本文化・習俗を勘考しつつ、日本の教会のために編した儀式(定式)書。日本で初めて印刷されたカトリックのラテン語典礼書。
1612-1613年		全国に及ぶ禁教令
~~~~~		
1854年		日米和親条約
1858年	7月29日	日米修好通商条約
	10月 9日	日仏修好通商条約
1859年		ジラル(Prudence-Seraphin-Barthélémy Girard, 1821-1867) 来日
1860年		ムニクー(Pierre Mounicou, 1825-1871) 来日
1860年	10月27日	プティジャン(Bernard-Thadée Petitjean, 1829-1884) 沖縄上陸
1862年	1月12日	横浜天主堂献堂
1862年	6月 8日	日本二十六聖人列聖式
1862年	11月	プティジャン横浜へ
1863年	7月	プティジャン長崎へ
1864年	2月	プティジャン横浜へ
	8月	プティジャン長崎へ

1865年	2月19日	大浦天主堂献堂
	3月17日	「信徒発見」
1865年		『聖教要理問答』 ムニクが横浜で出版した漢籍『聖教要理問答』(中国四川省、1844年版)の日本語訳版。漢籍かつ、当時の長崎の潜伏キリシタンの馴染み薄い用語が使用されたため、普及しなかった。しかし「秘跡」「十字架」「聖母」など、後に教会用語として定着する重要な語彙がすでに見出される。
1866年		プティジャン、日本代牧(ミリオフトの名義司教)に任命
		プティジャン、日本駐在教皇代理(代牧)に任命
		プティジャン、香港にて司教叙階
1867年	7月	浦上四番崩れ始まる。翌年、主要な信徒114名が萩・津和野・福山に流刑となる。
1868年		『聖教初學要理』 カトリックの教理入門書。1866年3月頃までには完成し、公刊以前から手書き冊子として配布されていたと推測される。
1868年(明治元年)		『聖教日課』 1868年(明治元年)にプティジャンが編集・刊行したカトリック教会の祈祷書。「朝の申上」「夜の申上」の二部構成からなっており、全部で37編の祈りが収められている。「プティジャン版」と呼ばれる、プティジャンの認可のもとで発刊された教会関連書籍のうちの一書。
1869年(明治2年)		『胡無知利佐无の略』 長崎の潜伏キリシタンの間で伝承された「こんちりさん(Contrição、真実の後悔)についての解説書『こんちりさんのりやく』の写本に基づき、プティジャンが編刊した信心書。
1873年(明治6年)		キリシタン禁制の高札の撤去
1876年(明治9年)	5月	日本代牧区、北緯代牧区と南緯代牧区に分割
1879年(明治12年)		『公教日課』 日本北緯代牧区長のオズーフ(Pierre-Marie Osouf, 1829-1906)のもとで1879年に横浜で刊行されたカトリック教会の祈祷書。日本代牧区が南北に分かれる1876年以前は、プティジャン版の『聖教日課』が版を重ねていた(1868、71、74年)。本書『公教日課』は『聖教日課』のオズーフ版であるが、両者には用語に若干の相違が見られ、収められたおらしよも同一ではない。1887年に校訂版が出版されている。
1884年(明治17年)		プティジャン帰天
1888年(明治21年)	3月	南緯代牧区から近畿・中国・四国の3地方が移譲され、中部代牧区として新設
1891年(明治24年)	4月	北緯代牧区、函館代牧区と東京代牧区に分割
	6月	四代牧区、司教区に昇格(東京は大司教区に)
		オズーフ、大司教に選任
1896年(明治29年)	3月13日	『公教会祈祷文』 東京大司教オズーフのもとで編纂された、日本初の公認統一祈祷書。全290頁。プティジャン版の『聖教日課』とオズーフ版の『公教日課』を主な源泉とする。「完全なる痛悔の祈祷」を所収する。
1948年(昭和23年)	7月10日	『公教会祈祷文』(その後[改訂]を重ねる)／カトリック教区聯盟(カトリック中央協議会)編
	10月 7日	『公教会祈祷文』(その後[改訂]を重ねる)／カトリック長崎大司教館(区)編

#### <展示資料>

- ・Marnas, Francisque, *La "Religion de Jésus" (Yaso ja-kyō) ressuscitée au Japon dans la seconde moitié du XIXe siècle*, t. 1 & 2, 2e éd., Paris : Clermont-Ferrand, 1931.
- ・フランシスク・マルナス[著]；久野桂一郎訳『日本キリスト教復活史』(みすず書房, 1985)
- ・長崎純心大学長崎学研究所編『1865年プティジャン書簡-原文・翻刻・翻訳：「エア写本」より：「信徒発見150周年」記念』(長崎純心大学博物館, 2015)
- ・ルイス・セルケイラ原著『こんちりさんのりやく』(出版者不明, [19-])
- ・天主堂編『公教会祈祷文』(8版)(天主堂, 1924)
- ・伯多祿瑪利亞准『公教日課』(北緯日本聖会, 1884)
- ・伯爾納鐸編『聖教日課：一八六八年(明治元年)』(復刻版)(プティジャン版集成：本邦キリシタン布教関係資料 第1期；4)(雄松堂書店, 2012)
- ・ロジェ・ヴァンジラ・ムンシ『村上茂の伝記：カトリックへ復帰した海外・黒崎かくれキリシタンの指導者』(聖母の騎士社, 2012)

(ISHIDA, Masahisa ; YAMADA, Naoko : 図書館事務課)

### 南山大学図書館「カトリック文庫」

「カトリック文庫」では、近代日本におけるキリスト教史の研究に資する資料群の構築を目的として、明治・大正・昭和初期のキリスト教関係出版物等を収集しています。これまで、購入はもとより、多くの皆さまからの貴重な資料の寄贈によって、コレクションを充実させてきました。この場を借りて、心よりお礼を申し上げます。

南山大学図書館カトリック文庫通信

カトリコス No.30 2015.11.1発行

<http://office.nanzan-u.ac.jp/TOSHOKAN/>

発行：南山大学図書館 カトリック文庫委員会

編集委員：石田昌久、加藤富美、関谷治代、山田直子

〒466-8673 名古屋市昭和区山里町18

Phone:052(832)3707/Fax:052(833)6986

* 図書館Webページでもご覧いただけます。